

フィンランド、その高福祉を支える国の素顔

井 口 光 雄 (北海道フィンランド協会専務理事)

抄 録

北欧の小国フィンランドは、1917年に独立した比較的若い国である。しかし背景には、700年以上にもわたる苦難の歴史があり、とりわけ隣国ロシアとの間では、独立後も言語に絶する厳しい関係が続いた。第2次大戦以降、フィンランドはこうした過去の歴史に区切りをつけようと、国民が心一つにして国の発展に努めた。そして90年代初頭の景気後退の波も何とか乗り越え、今日では新しく発足したヨーロッパ連合の模範生ともいわれるまでに成長した。

北海道とフィンランドは、北国の生活文化や社会福祉の先進国に学べと1970年代以降、急速に交流が深まった。社会福祉をはじめ学術、文化、スポーツそれに自治体間の交流など非常に幅広い。更に近年は、新たな地域起こしに結び付く産業クラスターや貿易の拡大などへと進展している。

本稿は、フィンランドの歴史を皮切りに今日の北海道とフィンランドとの関わりを伝え、社会福祉先進国フィンランドを支えるその素顔を紹介、若干ではあるが将来の問題に言及する。

キーワード：独立心、ゲートウェー、ヨーロッパ連合（EU）の模範生

はじめに

フィンランドを列車などで旅しながら直に接すると、フィンランド人のひととなりがよく伝わってくる。何時だったかローカルの列車で、隣り合わせたお年寄りが関心ありげに、でも、ただもじもじとこちらを見詰めている。で、私が片言のフィンランド語で話しかけるとうれしそうに一生懸命受け答えしてくれた。都会の人々や地方でも若い人たちは例外なく英語を話す、お年寄りなどは別だ。素材でちょっとはにかみや、心の温かい人たち、これがフィンランド人の一番の印象である。フィンランドの人と話しを交わすようになってから、かれこれ30年にもなるが、この印象だけは今も変わらない。

貧しさと忍耐力、そして強い独立心

「Suomi on köyhä maa, ei se laiskoja elätä」(フィンランドは貧困の国、怠け者は生きてゆけない) フィンランドに古くからあることわざである。1809年までの約600年間はスウェーデンの支配下で、その後、1917年にやっと独立するまでの百年余りもロシアの支配下にあったフィンランドの人々、特に農民達は、朝から晩までひたすら働かなくてはならなかった。

北海道の住宅作りのモデルともなっている位、快適な住宅、完備した福祉国家の現在の姿からは想像も出来ないが、フィンランドでは厳しく苦しい時代がつい数十年

前まで続いていた。その冬は長く、暗く、またしばしば冷夏にも見舞われた。農村人口の圧倒的に多かった昔、冷害によって多くの人々が飢え、亡くなった。19世紀の後半には、フィンランドの人々の多くが国を後にし、アメリカなどへ移民として渡っていった。

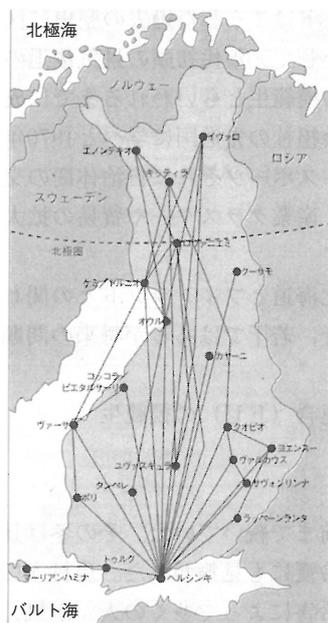
でもフィンランド人は非常に忍耐強く、独立心が旺盛で、簡単に人の言う通りにはならない。700年にも及ぶ気の遠くなりそうな年月、スウェーデン、ロシアの支配下の中にあっても、いつか自分の国を持ちたい、という願いを徐々に膨らまし、ついに今世紀の初頭に実現した。また自然を、特に森林を愛し、森を友として親しんだ。フィンランド人の強固な独立心と「風が松の梢を揺らしているうちは、フィンランドは飢え死にしない」のことわざ通り、1939年から40年にかけてソ連軍と戦った冬戦争の際も、勇敢なフィンランド軍は、広大なフィンランドの森を縦横に駆けめぐって10倍もの兵力を持つソ連軍に立ち向かい、一歩もひけをとらず、ヨーロッパの国々の驚きと賞賛を受けた。

第2次世界大戦後もソ連に課せられた2億ドル以上もの膨大な賠償金を歯を食いしばって支払い、1952年にはヘルシンキ・オリンピックを成功させて国際社会にフィンランドを強烈にアピールした。第2次大戦直後は400万にも充たなかった国民が(1996年500万を越える)一丸となって、国際政治や経済危機など幾たびかの苦難を乗り越え、人々の生活と福祉を充実させながら、フィンランドの今日を築いて来たのである。

フィンランドの現況

ヨーロッパの地図を開くと、一番上の方、つまり最北部にフィンランドがある。いわゆる北欧、スカンジナビア諸国の一国で、西にスウェーデン、東は1,300キロにも及ぶ国境線を挟んでロシアに接し、南はバルト海を挟んでエストニアが、北はノルウェーの北部がかぶさるように北極海を遮る（地図1）。

最南部にある首都のヘルシンキでも北緯60度、北部のラップランドは完全に北極圏に入る。つまり、夏は太陽の沈まぬ白夜のシーズン、冬は一日中太陽の上がらぬ日もある。しかし、冬でもフィンランドは意外に過ごしやすい。特に北海道に住む我々には全くと言っていいぐらい違和感がない。その最大の理由は、バルト海にも入ってくる暖かいメキシコ湾暖流のせいだ。



地図1 フィンランド（国内航空網）

国の広さは約33万8千平方キロ、日本に比べやや小さいが、そこに北海道より少ない500万人ほどしか住んでいない。だから、人口密度は日本の20分の一程度に過ぎない。“森と湖の国”の愛称が示すように森林は国土の65%を占め、湖は22万ともいわれる（写真1）。



写真1 森と湖の国（写真提供：フィンエア）

人々の住まいの多くは南部に集中し、首都のヘルシンキ（人口約50万人、写真2）、スウェーデン時代の首都トゥルク、工業都市タンペレなども南部に位置する。それに



写真2 首都ヘルシンキ（中央が白亜の大聖堂）

比べ最北部のラップランド県などは、車を走らせていても森と原野ばかりで、車にも時々会うぐらい、道路を悠々横断するトナカイの通過を待たなければならないこともある。実際ラップランドは、人間の数よりトナカイの数の方が多い。

フィンランド人の約6%は、スウェーデン語を母語とし、国会でも12の議席（一院制で議員総数は200名）を持ち、閣僚を送って大きな発言権を有する。公用語もフィンランド語とスウェーデン語の2カ国語である。ちなみに現在の内閣は1995年の総選挙で誕生した社会民主党を中心とした右から左まで7党による連立内閣、7をもじってレインボー・キャビネットとも呼ばれる。

最北部のラップランドには、約4千人の先住民民族サーミが主にトナカイの飼育をしながら住んでいる。もともとサーミには国境という概念は無く、フィンランドのサーミはノルウェー、スウェーデンのサーミと共通の民族評議会を作って、北欧3国の政府と民族問題を協議し、生活権を守っている。

14年前の1984年、北海道のアイヌ民族の代表が、私どもの協会の紹介で初めてフィンランドにサーミ民族を訪ね、交流が始まった（写真3）。サーミの人たちが日常生活でサーミ語を話し、学校を持ち、ラジオ局まで持っている。アイヌの人たちにとっては大きな驚きで、このことも契機となって、自分たちの言葉への関心が高まり、



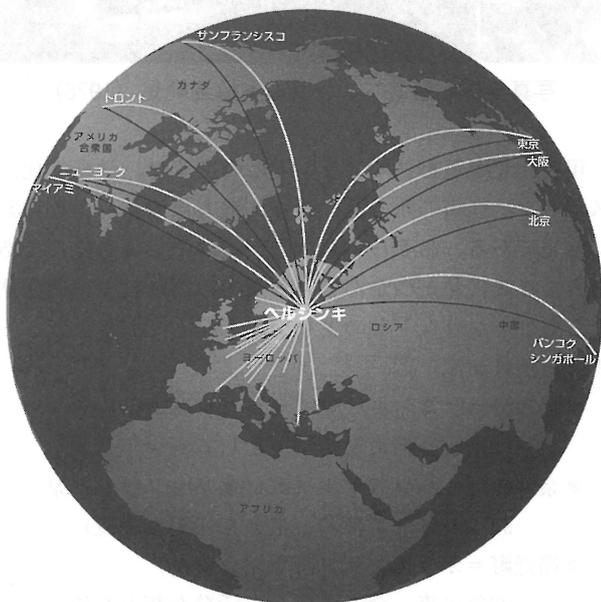
写真3 アイヌ・サーミ姉妹博物館調印（右端・筆者）

各地でアイヌ語の勉強会が盛んになっていった。ラップランドのサーミ博物館と白老のアイヌ民族博物館の姉妹博物館交流も始まり、研究者の相互交流、ヘルシンキの国立博物館(1988)やロバニエミの北極圏センター(1994)でのアイヌ文化展の開催などにもつながった。今年(1998年)3月の新しいサーミ博物館の開館式にもアイヌ民族博物館の代表が出席した。

フィンランド経済の発展、注目される
《ヨーロッパのゲートウェーとしての役割》

フィンランドは、第2次大戦後、農業国から先進工業国へと急成長し、特にハイテク、建築、工業、商業デザイン分野で大きく発展した。ちなみに1980年代の経済成長は先進OECD諸国中、日本に次いで第2位であった。90年代に入ってから日本以上に輸出依存の強かったフィンランドは、主要輸出先の西ヨーロッパの景気後退、輸出の20%以上を占めていたソ連の崩壊等の影響で大きなダメージを受け、多くの銀行や企業が倒産し、94年度の失業率は20%にも達した。しかしフィンランド経済はヨーロッパ連合(EU)加盟など、政府を中心とした積極的な政治的、経済的な対応が着実に実を結び、経済は急速に回復しつつある。

フィンランドは今、日本やアジアにとってヨーロッパのゲートウェーとして注目されている(地図2)。実際成田や関空から10時間足らずで首都のヘルシンキに直行便のフィンランド航空は着く(時差は冬で7時間、夏は6時間)。人口500万の国の航空会社フィンエアーが週4



地図2 ヨーロッパのゲート・ウェーフィンランド (フィンエアー提供)

便(夏は5便)飛ばすヘルシンキ便は、乗客の8割から9割が日本人で、かつてはその大半がヘルシンキでの乗り継ぎ客であったが、最近ではフィンランドそのものを目指す日本人が急速に増えている。

それは、ビジネスの世界でも顕著だ。スカンジナビア、バルト諸国、ロシア北西部からなる北ヨーロッパの新しい市場が、この地域の中心部に位置するフィンランドを媒体として、今大きく開かれたからだ。多くの日本の商社、ハイテク関連輸出企業もヘルシンキに新たな拠点を設け、それらを支援するジェトロ(日本貿易協会)のフィンランド事務所も今秋、ヘルシンキに開設される。

前述したように、フィンランドは長い国境線が象徴する如く歴史的にロシア(ソ連)と深い関わりがある。その多くは苦渋に満ちているが、それだけにロシア人の気質や商売のやり方などに精通している。ソ連の崩壊で受けた大打撃も、いつの間にか回復させた。昨年(97年)春、私どもの協会がフィンランドから経営コンサルタントを招いて開いた「ロシアとの交易」をテーマとしたセミナーは好評だった。ロシア貿易にはリスクが多い。フィンランドと同様ロシアを隣国に持つ日本にとって、フィンランドの蓄積されたノウハウから学ぶものが多い。

フィンランドと日本との関係

日本とフィンランドとの関わりを紐解けば、フィンランドがまだスウェーデンの統治下にあった江戸時代にまで遡る。1792年根室にやってきたロシア使節のアダム・ラクスマン(Adam Laksman 1766→?, 写真4)の父は、フィンランド生まれの植物学者である。この父キュリル(Kyril)・ラクスマンがシベリアの調査旅行中、たまたま漂流してカムチャッカにたどり着いた伊勢の船頭光太夫らを見つけ、彼らの願いを聞いて首都のペテルブルグで、時の女王エカテリーナ2世に謁見させた。

かねてからアジアへの進出に関心を持っていた女王は光太夫の送還を



写真4 アダム・ラクスマン (北大図書館蔵)

武器に日本へ使節団を送ることを決め、その使節に選ばれたのが息子のアダムであった。光太夫らを連れたアダム・ラクスマンは、翌1793年6月箱館港に入港、松前藩と謁見、光太夫らを返した。しかし、鎖国中の江戸幕府との交易交渉は成功しなかった。北海道にも縁のある歴史的事件であり、光太夫の物語も映画化もされたのでご存じの方も多いと思う。ともあれ光太夫の帰国にフィンランド生まれの親子が関わっていた事実は、フィンランドと日本の関わりを考えるにあたって興味深いエピソードと云ってよいと思う。

明治の日露戦争当時（1904-05）、日本の諜報機関とフィンランドの抵抗運動の人々が協力したという話はかなり知られている。ヘルシンキ沖のバルト海上を、当時世界最強と言われたバルチック艦隊がもうもうと黒い煙を吐いて日本に向かうのを目前に見たフィンランドの国民は、大国ロシアに楯突いた東洋の日本という国の終焉を思い、同情しあった。結果はご存じの通り、あのロシアが破れたのだ。連合艦隊司令長官の東郷の名は広まり、フィンランドのロシアからの独立への機運にも少なからず弾みがついたと言われている。

1917年の独立後、2年後に日本と国交を樹立、初代の公使として著名なアルタイ語系言語学者のラムステット教授(Gustaf John Ramstedt 1873-1950)が着任した。教授の「初代公使滞日見聞録」(1987年、日本フィンランド協会発行)が私の手元にあるが、10年間の公使としての滞日中、教授がいかに日本を愛し、日本研究を進めていたかに深く感動した。

フィンランドと日本の関係は、第2次大戦中、一時断絶はあったものの、戦後もいち早く復活した。近年は両国間の貿易関係も順調で、政治的にも何ら問題がなく、良好な関係が続いている。

フィンランドと北海道との交流の歴史と現在

北海道とフィンランドとの交流は、北海道に派遣されていたフィンランド国教のキリスト教ルーテル派の宣教師を通じて戦前からあったし、戦後も冬のスポーツなどを通じて行われていた。しかし、目立って顕著になったのは1970年代に入ってからである。1971年に就任した堂垣内北海道知事が、北海道開発庁次官当時から提唱した北方圏交流が契機となり、フィンランドを含めた北方圏への関心が一挙に高まったからだ。

それまでの北海道の人々は、日本の最も北の、雪深い寒冷地に住みながら、住まいや衣服などの殆んどを東京などで作られたものに頼っていた。北方圏構想は、北国の暮らしや文化は、そこに住む人たち、つまり北国の人たちの感覚や考えで作ろう、という発想から生まれてい

る。このため北国の先進地、北欧やカナダを実際に見て学ぼうという運動が起き、70年代に入って様々な分野の視察団が北の先進国を訪問するようになった。特に北欧諸国への関心が高かった。

北海道とフィンランドとの交流を見るとき、フィンランド日本協会の存在が欠かせない。この協会は1935年、先に紹介した初代駐日公使のラムステット教授によって設立されたのだが、72年の札幌オリンピックがきっかけとなって、当時の会長で、宣教師として札幌滞在の経験のあるサボライネン氏(Arvo Savolainen)が北海道に深い関心を寄せ、73年には北海道からの40名近い青少年視察団全員をヘルシンキでホームステイさせるなど、交流の機運は一気に高まった。

1975年秋の同協会の創立40周年記念式には、堂垣内知事夫妻を始め本道から10数人が出席した。その中には初代フィンランド名誉領事の松坂有祐氏、旭川の今村源吉道教育大教授、札幌の伊藤隆一道教育大教授(何れも当時)、私も参加した。翌76年10月サボライネン氏らを招いて北海道フィンランド協会が発足(写真5)、以降、交流は着実に発展していった。



写真5 北海道フィンランド協会発足(1976)

現在、北海道とフィンランドとの交流は、学術文化、スポーツ、経済の多方面に渡り、地方自治体も含め非常に活発である。おそらく北方圏交流の中で最も盛んであろう。ここに私がかんている道内の市町村や民間団体などのフィンランドとの主な交流を記しておく。

1. 自治体交流

* 壮瞥町 = ケミヤルピ町 (ラップランド県)

93年友好都市締結 (主として青少年交流)

* 奈井江町 = ハウスヤルピ町 (東フィンランド県)

94年友好都市締結 (主として福祉交流)

* 端野町 = オウルンサロ町 (オウル県)

92年以来、会を結成して活発な相互交流

2. 自治体に関わる民間交流

* 名寄市 = ロバニエミ市 (ラップランド県都)

ン (Paavo Lipponen) 首相は京都の同志社大学での講演で、フィンランドがEMU (欧州経済通貨同盟) 加盟の全ての条件を既に達成していること、力強い発展が期待される欧州北部領域の中心に位置し、さらにEUとロシアの協力推進者として将来大きな役割を期待されると強調したあと福祉問題にもふれ、「(90年代初頭の) 経済的試練を乗り越えたことが北欧福祉国家にとって朗報となっている。大幅な失業率の増加にもかかわらず、異なる所得層間での不平等格差は起きておらず、福祉国家としての救済システムは概ね維持された」と語り、将

来への安定成長に自信をのぞかせていた。

19世紀、フィンランドがスウェーデンの長い支配からロシアの支配下に替わったころ、A.アーウイッドソンは、「我々はスウェーデン人ではない。ロシア人にはなれない。フィンランド人である」と民族意識を鼓舞し、20世紀での独立へとつないだ。21世紀を目前に今、北海道より少ない人口わずか500万人余りの小国フィンランドは、EU加盟国の一員となりながらも、ヨーロッパ北部地域の中心的な役割を担う“大”国家を目指し、確かです。したたかな歩みを続けている。

Finland ~Profile of the state that supports her high welfare system~

Mistuo Iguchi : Managing director, Hokkaido Finland Society

Abstract

Republic of Finland, a small Scandinavian country, is a young nation that won independence from Russia in 1917. Before that, however, Finland was in adversity over 700 years and even after her independence. Finland had to keep very sensitive balance with an enormous neighbor, Russia. Since the end of the Second World War, Finnish people have accorded in order to leave off the past and to develop their home country, accordingly, they could tide over an economic crisis in the beginning of 1990's.

Hokkaido has considered Finland as an advanced country especially in the fields of the life and culture in the North and the social welfare since 1970's, thus, our relationship and friendship deepened rapidly. Our common interests varies in the fields of the social welfare, academic and cultural issues, sports and the interchange at the municipal level. Currently, the fields are expanding into large-scale trade and the idea of industrial cluster that would vitalize municipalities concerned.

In this article, various important viewpoints such as the historical background of Finland, the basis of the advanced welfare country and some future perspective are discussed.

Key words : independence, gateway, a model student in EU